

歩く文化の国、イギリスのフットパス事情

The footpath in United Kingdom



小川 巖

エコ・ネットワーク代表

はじめに

歩く文化などあるのかと、首をひねる人が多いかも知れない。特に北海道では歩く習慣そのものが希薄な地域とは誰しも一致して認めるところだろう。卑近な例でいえば、200m先のコンビニやゴミステーションに行くのに車という人が多いのではないだろうか。札幌市内に住んでいて地下鉄とか路線バスに乗ったことがない人だっている。要するに、車への依存度が極度に高いのである。近隣と離れているためとか、公共交通機関の未整備によって車依存が習慣化してしまったのでは、という弁明が聞こえてきそうだ。

スピード、便利さを求める車社会だけが肥大化してしまい、その対極にあるゆっくり、スローが置き忘れられてきた北海道と言えそう。その点本論の舞台となるイギリスは、まったく異なる様相を示しているように見える。英国本土の主要部分を占めるブリテン島はモーターウェー（Mロード）と呼ばれる高速道路網が四通八達している。一般国道、道道に当たるA、Bロードも網の目状に通じている。全体に地形が平坦で丘陵地と平野によって占められているだけに路網密度は日本より遥かに高い。そういう道路事情であるから、高速道はもちろんのこと、A、Bロードでもかなりのスピードで走行する。その意味では北海道（日本）以上の車社会の国というよりよいだろう。

ところが、イギリスの人々は車に代表されるスピードを伴う生活を求める一方、その対極にあるスローな生活を楽しんでいるように見える。そのひとつの典型がフットパスなのである。同じ島国でありながらこの違いはどこから生まれたのだろうか。

イギリスでもっともポピュラーなアクティビティといわれるフットパス歩きを通して、北海道に欠落しているものを見出そうとするとともに、道内各地

で始まったフットパス活動を紹介するのが、本論の狙いである。

歩く権利を獲得した国

そもそもフットパス（Footpath）とは何か説明しないとイケないだろう。ランダムハウスのような大きな辞書に当たっても、ただ「歩く道」とか「小道」とあるだけでそれ以上突っ込んだ記述は見当たらない。これはもっぱらイギリスで使われている言葉で、トレイル（Trail）、ウェイ（Way）、パス（Pass）なども同じ意味で使われている。アメリカではもっぱらトレイルが用いられているようだ。

フットパスの国イギリスには全長20数万kmに及ぶフットパスが文字通り国土を縦横に走っている、といわれている。彼の国のカントリーサイド（田園地帯）や街の中を歩いていると「パブリック・フットパス」と書かれた道標をしばしば見かける。パブリックを単に「公共」と訳しただけでは、本来もっている意味が読みとれなくなる。このパブリックという言葉の裏には、民衆と土地所有者との歩く権利を巡る壮絶なバトルの歴史が隠されている。詳細はそれをテーマにした優れた解説書（平松紘「イギリス緑の庶民物語—もうひとつの自然環境保全史—」1999年）に譲るとして、私なりに分かりやすく説明すると、おおよそ次のようになる。

イギリスには、日本の入会地（共有地）に相当するコモンズ（Commons）が全国至るところにあった。コモンズは隣接する村落共同体に住む人々が一定のルールのもとに



牧場内を通るナショナル・トレイル

共同使用する場である。そこへ通ずる道はコモンズの成立期からあったと考えられる（道がなければ利用できない）。時代が下って、特に18世紀後半に始まった産業革命の後、各地で勃興した産業資本家、貴族などにコモンズを奪われていった。いわゆる囲い込み（エンクロージャー Enclosure）である。

19世紀に入って囲い込みの撤回を求める運動が各地で起こされ、裁判の結果、かつて地域住民が通行していたことが証明された土地の道はパブリック・フットパスとして認められた。そのような道には歩く権利があるというわけである。

法的には1932年制定の「歩く権利法」によって誰でもパブリック・フットパスを歩くことができるようになった。また戦後、1949年に「国立公園・アクセス法」の制定によって、この権利がより強固なものになった。

パブリック・フットパスを歩くのは自由とはいえ、牧場の中を通るフットパスを歩く際は、ゲートをきちんと閉めるとか、道から外れて行なう活動（キャンプ、植物の採取など）はしない、といった歩行者義務が伴うのはいうまでもない。

土地に対する所有権が強大な我が国では到底考えられない制度の上に立って、フットパスが成立している点に留意する必要がある。現存する畑、牧場、工場、ゴルフ場、軍事基地などに先立って、道が先にあったとなれば、後から作られた農耕地、諸施設の中をパブリック・フットパスが通っている例は多い。例えばゴルフ場の中にフットパスがあると、歩行者が通り過ぎるのを確認してからプレイを再開するのだという。

フットパスの実際

フットパスは道には違いないが、人一人が歩けるだけのスペースがあれば、それで十分機能する。それ以外余計な手を加える必要などないことが、イギリスに行くときよく分かる。一般道路と併用している部分は別として、舗装している個所は皆無であったし、自動車道でいえば国道に当たるナショナル・トレイル（National trail）でさえ、踏み分け道といった感じのフットパスがむしろ普通であった。ついでに言えば、この国のサイクリングロードはほとんど未舗装であった（サイクリングロードは後述するようにフットパスと併用しているルートが多い）。

だからといって放ったらかしというわけではない。最小限の配慮は行き渡っている。要するに、フットパスへの行き過ぎた投資、やりすぎの人為を排して昔のままの状態を保存しようとしている姿勢がうかがえる。

イギリスの人々にしろ、外国人であれ、フットパス歩きは思い立てばすぐに実行できる。それを保障している仕組みについてやや詳しく説明してみたい。

フットパスの種類

一口にフットパスと言ってきたが、実は3種類から成っている。本来のフットパスは歩行専用路を意味している。二つ目はサイクリング、または乗馬との併用路でブライドルウエー（Bridle way）と呼ばれ、中長距離のことが多い。三つ目は車も通行可能な道でバイウエー（Biway）である。歩行専用のフットパスがもっとも多く（全体の約75%）、続いてブライドルウエー（21%）、バイウエーの順になる。バイウエーでは、車の通行が認められるとはいえ、地元の人たちの農作業用車両であって、一般車両がドライブする道ではない。

道標（ルートサイン）

道標には2つのタイプがある。ひとつは横木式のものでFootpathまたはPublic footpathと書かれ、方向を示すだけでなく、進むべき地名が併記されている場合がある。この道標は全国一律でロンドンのような大都市を含め、至るところで見ることができる。

もうひとつのタイプは、直径15cmほどの丸型に矢印が描かれているも

のである。出入口とか主な分岐点などには横木式の道標が、それ以外の分かりづらい個所には、この円型タイプの道標が貼り付けられているというのが一般的である。両者の組合せによって、初めての人でも迷わずに歩けるというわけである。

円型タイプには、矢印で方向を示すだけでなく、いくつかの情報が盛り込まれている。まず色で3種類の



分岐点に立つ横木道標



円形の道標（テムズパス：ナショナル・トレイル）

フットパスを区別している。黄色が歩行専用フットパス、青がブライドルウェー、赤がバイウェーという具合である。ドングリのマークが入っていれば、そのルートがナショナル・トレイルであることを示している。たいていの場合、そのフットパスの名称も記入されている。

ゲート

イギリスは伝統的に羊の飼育が盛んである。またカントリーサイドの多くは牧場である。必然的にフットパスは牧場の中を通ることになる。家畜を逃がさないためと、野犬などの侵入を防ぐ目的で出入りに当たってゲートを開閉する場合と、柵などをまたいで通過する場合がある。前者がキッシングゲート (Kissing gate)、後者がスタイル (Stile) である。



キッシングゲート



もっともポピュラーな踏み台

キッシンズ・ゲートは狭いゲートを通らねばならず、前後の人と顔がくっつきそうになるところからキス (Kiss) が用いられているようだ。スタイルはただの踏み台である。

ナショナル・トレイル

幹線フットパス、国設歩道ともいべき長距離歩道のことをいう。おおむね100km以上の長さを持つ。イギリス全土にカントリーサイド委員会公認のルートが10数本あるほか、公認されていない長距離歩道は数十本ある。最長はブリテン島南西部に延びるコーンウォール (Cornwall) 半島の海岸沿いに設けられた南西沿岸フットパスで、延長約965kmに達する。

OSマップ

ありがたいことに、スコットランドを含むイギリス全土を網羅したオーデイナリー・サーベイ (Ordinary Survey : OS) 発行の地図 (OS Map) が市販されている。縦88cm、横100cmのサイズだから、かなり大判といえる。縮尺は2.5万分の1で統一さ

れている。一般書店をはじめ、各地にあるインフォメーションセンター、ビジターセンター、さらには土産物屋、ガソリンスタンドでもその地域のOSマップが市販されている。1部の価格は日本円にして1,500円前後である。情報のキメの細かさを考えると決して高いとは思わない。



OSマップの一部(コッツウォルズ地方)

片面印刷が多いが、地区によっては両面の場合もある。

この地図にはフットパスが種類ごとに分かるように描かれている。このマップさえ入手すれば、初めて訪れる人でも間違えることなく歩けるすぐれものである。

面白いのは、通常の地図情報に加えて、パブやキャンプ場の所在地、公衆電話の位置、展望台などのマークが入っている点である。どこまでも歩く人の立場を配慮した作りになっている一例と云えるだろう。

ガイドブック

OSマップとは別に地域ごと、ルートごとのガイドブックはそれこそ無数にある。コピーしただけのシンプルな1枚ものから、100~200頁に及ぶ本格的なガイド本まで多種多様である。コース紹介から始まって沿道の歴史、文化、食べ物、BB (ベット & ブレックファースト : 日本の民宿に近い)、パブ情報とそれぞれ個性を競っている。もっとも全て英語で書かれているので使いこなすのは無理としても、地図やルート図は参考になる。これもOSマップ同様、色々な場所で販売されている。地域限定のものがほとんどなので、その場でしか入手できないものが多い。気に入ったのがあればまず購入した方がよい。



ガイドブック一覧の数々

パブ、BB

ある程度の規模の街でないレストランなどの食事場所はないと思った方がよい。その点パブは、どんな小さな集落であっても1軒や2軒必ずといってよいほどあるものなので助かる。日本でパブというと居酒屋のイメージが強い。実際にパブに入って気づくのは、土地の人たちが集会場のように使っている点である。奥はたいていレストラン風のスペースがあって、テーブル、イスが並んでいる。OSマップで位置を予め確認して昼頃到着するようにコースを選ぶとよいだろう。トイレも使えるので、パブはフットパス歩きには欠かせない施設である。

同様にフットパス歩きの強い味方がBBである。1～2部屋のみというのから小さなホテル並の規模を持つものまで多様性に富んでる。パブ同様小さな村にもあるので、連続して歩くときなどBBを利用すると、無理なく歩き通せる。朝食付の値段は3,000円位からあるし、出される朝食は結構ボリュームがあるので、食べ過ぎに注意といったところか。

英国のフットパスを歩く

1990年代中頃から「ピーターラビット」「ナショナルトラスト」を訪れるツアー、エコロジーパークなどを巡る海外環境研修を年1回のペースで実施してきた。フットパスの存在には早くから気づいていて、毎回1～2日を費やして歩いてきた。

2002年からは「英国のフットパスを歩く」として訪問地を毎回変えて歩くようになった。訪問先と主なフットパスを示すと次のようになる。

- 2002年：テムズパス(ロンドン及び郊外)、南西沿岸フットパス(コーンウォール半島)
- 2003年：ペナインウェイ(中部イングランド)、湖水地方のフットパス
- 2004年：バンガードウェイ(イングランド南部)
- 2005年：スコットランドのウィスキー街道、グレート・グレンウェイ(有名なネス湖に沿って北岸を東西に走るフットパス)
- 2006年：コッツウォルズのフットパス、ダートムーアのフットパス
- 2007年：ドーバー海峡沿岸フットパス、フランス・カレー地方のフットパス

このツアーには毎回20名前後のウォーカーが参加した。その大部分は北海道の人たちで、男女の割合はほぼ半々、50代以上の中高年が主体であった。1

日平均15km前後を歩いた。

2002年に実施したテムズパスを例にとると、ロンドン南西のリッチモンド(有名なキューガーデンのすぐ近く)まで中心部のホテルから地下鉄で行き、街外れのテムズ川沿いのテムズパス(長距離歩道のひとつ)まで行く。そこから10数km上流のテニスで有名なウィンブルドン公園まで歩き、帰りはバスでリッチモンドに戻った。2日目はエリザベス女王の居住するウィンザーまでBR(英国鉄道)で行き、そこからテムズ川沿いに下って引き返すルートを選んだ。道すがらカナダガンの親子やアナウサギに出会ったり、花の数々に歓声を上げたり、存分にフットパス歩きを楽しんだ。ちなみにテムズパスはロンドン市内から源流部まで約280kmのフットパスである。

2004年のバンガードウェイ歩きは、例年とは異なり、歩くのに必要のない荷物はロンドンのホテルに預け、必要最小限の荷物を小さなザックに詰めて歩いた。ロンドン南方のチャートウェル(チャーチル元首相の住居)をスタートして4泊5日で、イングリッシュ海峡に面したホワイトクリフと呼ばれる石灰岩の断崖が続く海岸まで歩くというもの。ただし、百数十キロを歩き通すには日数が足りないため、途中はBR、バス、タクシー、保存鉄道などさまざまな交通機関を乗り継いでの旅だった。

北海道にも広がるフットパス

歩くことにもっとも縁遠いと思われていた北海道でも、フットパスを作ろう、歩こうという動きが、この数年でにわかにはまりをみせてきた。私の知る限りでは、道内のほぼ全域、30カ所前後の地区、地域でフットパス活動が始まっていて、年々増加している。この流れを確かなものにすべく、2003年に全道フットパス・ネットワーク準備会を組織し、年に1～2回のペースで全道フットパスの集いを各地で開催してきた。ちなみに、平成19年には6月30日、7月1日に空知管内南幌町、10月13、14日には後志管内ニセコ町で開催してきた。

フットパス活動は地域の住民、市民が主体であるが、役所と連携して進めている町村も出てきた。本論ではフットパス発祥のイギリスの例を紹介するのが主題であるため、道内での取り組みについては詳しく触れるだけの紙幅がないので、ひと言だけ重要

なポイントを挙げておくと、それは官民の役割分担とあってよいように思う。

一般の公共事業と違って、歩くだけの道であれば、地域の人たちのパワーで作ったり、選んだりできる。というよりは、新たに作らなくても既存の道をつなぐことで、数kmから10数kmのフットパスにすることは可能である。行政の縦割りで作られた短い距離の園路、遊歩道、管理道、林道などはどこにでもある。それらを結ぶだけでも個性豊かなフットパスができる。新たに作るのは最後でよいと思う。ひとつの市町村にまず一本のフットパスを設け、徐々に増やしていき、機が熟した時点で隣の市町村と結べば、ノーザン・トレイルとでも呼ぶべきネットワーク網が一気にでき上るといったものだ。

国であれ、自治体であれ、フットパス作り（選び）は地域の人たちの主体性に任せ、活動をサポートするようにした方がうまくいくのではないか。行政は土地の使用に当たっての保証人的な役割が期待されるし、トイレの設置とか、広域フットパスマップの作成、情報提供といった部分で役割を発揮すべきであろう。

このようにフットパスを通じた新しい官民連携が実現できると考えたらどうだろう。既にいくつかの町村でそのような動きが始まっているのは、本当に心強い。

おわりに

イギリスで民衆のパワーによって「歩く権利」を獲得したところからフットパス（正しくはパブリック・フットパス）が生まれた。私有地といえども、侵害をもたらす行為をしない限り、誰でも歩けるのはイギリスの話であって、北海道（日本）にその発想を持ち込むのはナンセンスというもの。逆立ちしても本場のフットパスは真似できないのは自明である以上、居直って北海道型のフットパスをどうやれば構築できるのかを考えなくてはならないだろう。

健康面から歩くことが重要視されて久しい。それだけにとどまらず、地域の活性化を図る手段ともなりうる。少し前まで道内を歩いて旅するなど誰が考えたのだろうか。欠落していたスローの部分埋め合わせるのにフットパスはぴったりだ。それに金がかからず、地域の人たちの知恵が生かせる。あと数年もすれば、北海道を歩こうという流れがきっと出てく

る予感がする。それにはまず地元の人たちが歩く楽しさを身につけるところから始めないといけない。やっとなそういう時代が訪れようとしている。

フットパスは奥が深い、というのが私の最近の感想である。実はコースが十分に手入れされ、地図もあって、標識も完備しているフットパスは残念ながらまだまだ少ない。整備途上にあると言ってよいだろう。そんな中で初めてでも安心して歩けるフットパスとして、黒松内町にある3本のコースをおすすめしたい。そしてぜひ1泊してスローな気分を存分に味わってほしいと思う。



麦畑のまん中を通るフットパス（イギリス）

参考資料

- 1) 平松 紘：イギリスの緑の庶民物語—もうひとつの自然環境保全史—, 明石書房, 244頁, 1999年
- 2) 市村 操一：誰も知らなかった英国流ウォーキングの秘密, 山と溪谷社, 274頁, 2000年
- 3) 平松 紘：ウォーキング大国イギリス—フットパスを歩きながら自然を楽しむ—, 明石書房, 185頁, 2002年
- 4) 北海道新聞野生生物基金：モーリー No.7 〈特集 歩く道の文化英国生まれのフットパスを北海道にも〉, 8-39, 2002年
- 5) 北海道新聞野生生物基金：モーリー No.12 〈特集 北海道を歩こう！「フットパス」の愉しみ〉 38-61, 2005年
- 6) 小川 巖：人が歩くほど北海道は元気になる—私のローカル・フットパス論—, ほっかいどう政策研究, 14：17-23, 北海道自治政策研修センター, 2004年
- 7) 小川 巖：北海道のフットパス最新事情, モーリー No.12, 39-42, 北海道新聞野生生物基金, 2005年
- 8) 小川 巖：黒松内のフットパス作り—可能性と課題を探る—, 北方林業56 (6), 1-4, 北方林業会, 2006年
- 9) 小川 巖：フットパスは地域を変える—北海道の取り組みから, 北のランドスケープ—保全と創造—, 164-172, 環境コミュニケーションズ, 2007年

イギリスにおけるフットパスの歴史と由来については1)が、本場のフットパスの楽しみ方は2)、3)がびったり。道内のフットパス事情は4)、5)が詳しい。

profile

小川 巖 おがわ いわお

1945年松前町生まれ。信州大学農学部を経て北海道大学大学院農学研究所修士。道庁勤務の後、1984年野生生物情報センターを設立、代表委員。'92年からエコ・ネットワーク代表。全道フットパス・ネットワーク準備会事務局長兼務。